



むらやま りゅういち
村山 龍一さん

一度きりの人生でチャンスという言葉が使えるのは何度くらいあるのだろうか——

平成8年、東さんはそんなことを考えていた。きっかけは「ボランティアでアメリカに日本庭園を飾りに行かないか」という誘いだった。旅費無し、休み無し、おまけに観光無し。行く人はほとんどいないだろうと思われるその条件に乗った。

「そのときは40歳でした。人生の折り返し地点に差しかかっているのに、死んだような目をして自分自身にチャンスが舞い降りてきたんです」と東さんは話し始めた。

若いときは、オートバイが好きだった。ラリーに出場したり、ツーリングをしたり充実した毎日。東さんの目は輝いていた。

しかし仲間の一人が亡くなったことをきっかけに活動が無くなり、目の輝きを失っていった。

何かをしたい。そんなときに声をかけられた。

「仲間にも声をかけてもらえたことがうれしかった。お金が無いけど……って理由も無いかったですね」本当に自分の力が必要とされていることに、東さんは感動した。

そして自費で参加することが大事だった。「自費参加じゃなければ行かなかった」と話す。

そして始まった庭園づくりは簡単な作業ではなかった。朝早くから夜遅くまで作業を行い、寝るだけの生活が5日間続いた。「それでも楽しかったんです。帰国のときも早朝にこっそり帰ったんです。しかしこれが『かっこいいな』と思ったんです」自分のできごとをやった充実感と楽しさだけが残った。

こうして庭園は見事に完成し、ヘイスティングズの多くの人たちから感謝され表彰もされたが、それは目的ではなかった。充実感はずっと庭のことを考えていた。知らないうちに庭園のことが生活の一部になっていた。

あれからヘイスティングズには、3回行った。庭園の修復も兼ねているが、1回目と違うことは、人に会いに行っていることだ。「ヘイスティングズは人の魅力があるから行くんです」

楽しさと自分にできることを追求した結果、友好の証が生まれた。それは、東さんの粋な人柄があったからこそだ。

先生がいたから、今の自分がある。

大津町のスポーツも「まちの誇り」の一つだ。強くなりたいたい。その一心で、先生から教を請い、体を鍛えた。少年は大人になると、何を感じ、何を思い、何を伝えようとするのだろうか。剣道を続けてきたことの感謝と思い。大津町剣道連盟会長の村山さんの心を覗いてみた。

「こう見えても子どものころは病弱だったんです」村山さんには、つこりと笑って話し始めた。

剣道との出会いのきっかけは良くなる話。友だちがやっていたから自分もやりたいと思った。子どものころから病気がちで病院に1カ月ほど入院することもあった村山さんが、剣道を始めたのは小学5年生のときだった。

その後も体調を壊し、剣道ができない時期もあったが、それでも見学に練習場である大津武道館に毎日通い続けた。

高校は、菊池高校に進学した。中学のとき、大津町剣道連盟が毎年町で開催している「大津つじ祭り剣道大会」で同校剣道部の強さを見せつけられた。そこで剣道がしたいと思った。「大津から剣道をするために菊池高校に行つたのは、同級生では自分だけだったんです。だから頑張りましたね」と当時を振り返って笑う。学校での練習が終わり、家に帰って10kmのランニング。それから素振り500回を毎日こなした。努力は実る——高校総体団体2位。他の大会でも個人戦で優勝するなどの成果を残した。高校になりやっと同級生と肩を並べることができた。

高校卒業後、東京の民間企業に就職した。練習は継続していたが、数年後退職。大津町に帰ってきた。「帰ってきて暇をもてあましていたら、同級生が『暑中稽古』に行こうって誘ってくれたんです」職を探しながらも剣道が続いていた。その後、大津町役場に就職すると連盟の事務局を任せられた。仕事も忙しかったが、練習の合間に大会の準備などを行ってきた。

元町長である大村直純先生、大村勲先生、西島洋一先生、菊池弘徳先生など小学校、中学校、高校と多くの先生に教わってきた。先生たちから教わったことは今でも忘れていないし、今だからこそ理解できることもある。

子どものころに努力したこと、先生たちからの教えが「何でもやればできる」という努力の大切さを知ることになった。「これだけ（先生たちから）教わったんですから、これからは自分たちが子どもたちに教えていかなければ」と思っていますね「親に心配をかけるように、礼儀作法やあいさつには厳しい。

「剣道をしていて良かったなと思ってもらえるようにやっていきたいですね」と話す村山さんの顔には「剣道をやっている良かった」と書いてあった。

姉妹都市ヘイスティングズ市（アメリカ合衆国ネブラスカ州）のヘイスティングズ大学内に日本庭園が出現したのは平成8年。日本とアメリカが手をつなぎ完成した庭園は、今でも友好の証として残っている。東さんは、その間に4回も有志たちと市を訪れている。彼は庭園作業を「チャンス」と考えた。その言葉にはどのような思いが込められているのだろうか。

自費じゃなければ、行ってないですね。



ひがしなおとし
東直利さん